

# 舞踊（ダンス）系大学のカリキュラムの現状

大 迫 菜 緒

キーワード：舞踊、舞踊教育、ダンス、カリキュラム

## はじめに

日本は第二次世界大戦後、小・中・高校及び大学における「学校体育指導要綱」（文部省・昭和22年）が示されてから、ダンスは体操とスポーツに並んで示されるようになった。既成の作品を教えることから、ダンスによって自己の表現を引き出すことに視点を換え、ダンスの特質を生かした教育へと転換していった。

小・中・高校は体育の中にダンスが位置付けられ、自己を表現し、仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを目的として学校教育の中でダンスによる教育効果が重要視されている。大学における舞踊（ダンス）は、明確な位置付けはなく、各大学が教育、芸術、体育、音楽などの分野の中に多様な形で位置付けている。長きに渡り舞踊教育を担ってきた体育科教育の中での舞踊は今もなお発展し続けている。また芸術の分野や音楽の分野における舞踊教育も独自の方針で進展し、今ではクラシックバレエやポピュラーダンス（ストリートダンスなど）、テーマパークダンスなど様々なジャンルのコースも増え、各大学特色のあるカリキュラムが展開されている中、先行研究では、初等教育や中等教育の舞踊教育に関する事項や海外の大学におけるダンスカリキュラムなどを取り扱う研究は見られたが、近年の日本の舞踊（ダンス）系大学のカリキュラムを取り上げるものは見られなかった。

本研究では、舞踊（ダンス）を専修、専攻、コースに設置している大学に焦点を置き、今回は6校の大学を対象として本論を進めていく。6大学の沿革、教育方針、カリキュラム、シラバスなどをまとめ、それぞれの大学において舞踊（ダンス）教育をどのように展開しているのかを考察する。現在、日本には4年制大学が、国立、公立、私立合わせて782校、短期大学が331校（文部科学省（平成30年度））ある。その中で舞踊（ダンス）を専修、専攻、コースに設置している大学は、大学13校、短期大学5校、計18校であった。

## 〈舞踊（ダンス）系大学一覧〉

	大学名	学部・学群・学科・専攻	学科・専修・専攻・コース
1	お茶の水女子大学	文教育学部芸術・表現行動学科	舞踊教育学専修
2	桜美林大学	芸術文化学群	演劇・ダンス専修
3	日本大学	芸術学部演劇学科	日舞コース、洋舞コース
4	尚美学園大学	芸術情報学部舞台表現学科	ダンスコース
5	芦屋大学	臨床教育学部教育学科経営教育学部経営教育学科	ダンスコース バレエコース
6	名古屋芸術大学	芸術学部芸術学科音楽領域	ダンスパフォーマンスコース
7	洗足学園音楽大学	音楽学部音楽学科	ダンスコース、バレエコース
8	名古屋音楽大学	音楽学部	舞踊・演劇・ミュージカルコース
9	大阪芸術大学	芸術学部舞台芸術学科	舞踊コース、ポピュラーダンスコース
10	日本女子体育大学	体育学部運動科学科	舞踊学専攻
11	神戸女学院大学	音楽学部音楽学科	舞踊専攻
12	昭和音楽大学	音楽学部音楽芸術運営学科	バレエコース
13	多摩美術大学	演劇舞踊デザイン学科	演劇舞踊コース
14	九州大谷短期大学	表現学科	ミュージカル / ダンスコース
15	大阪芸術大学短期大学部	メディア・芸術学科	ポピュラーダンスコース
16	昭和音楽大学短期大学部	音楽科	バレエコース
17	大阪音楽大学短期大学部	音楽科	ダンスパフォーマンス・コース
18	名古屋文化短期大学	生活文化専攻	テーマパークダンス・バレエコース

(順不同)

## 1. 各大学の特色

本研究ではお茶の水女子大学、日本女子体育大学、桜美林大学、尚美学園大学、洗足学園音楽大学、昭和音楽大学の6大学を取り上げる。2019年度現在、情報公開となっている沿革、教育方針、履修ガイド、シラバス、などの情報から6大学の特色を述べる。またカリキュラムにおいては、2019年度入学生用に示されている内容を取り扱う。

1-1. お茶の水女子大学 文教育学部 芸術・表現行動学科 舞踊教育学専修<sup>2</sup>

お茶の水女子大学は、上記であげた大学の中で唯一国立大学であり、長きに渡り舞踊教育を牽引してきた歴史ある大学である。お茶の水女子大学は東京女子師範学校として1875（明治8）年に設立された。第二次世界大戦後の1949（昭和24）年、国立学校設置法により新制大学「お茶の水女子大学」となった。

1949年「お茶の水女子大学」が新制大学として発足した年に、理家政学部・文学部の2

学部が新設され、発足した当初の文学部は、哲学・史学・地理学・文学・教育学の5学科によって構成された。発足して間もなく教育学部の独立を試みたが実現せず、1950（昭和25）年、文学部は文教育学部となり、理学部、家政学部を加えた3学部となった。文教育学部は女子高等師範学校の伝統を受け継いで、教育学・体育学・音楽教育学を加えた組織として出発した。1996（昭和8）年には文教育学部は7学科に増えたが、現在は人文科学科、言語文化学科、人間社会科学科、芸術・表現行動学科となっている。

芸術・表現行動学科は入学時に舞踊教育学・音楽表現のどちらかのコースを選択して受験し、2年前期にそれぞれの選択した専門コースに所属する。舞踊教育学コースのカリキュラムはコア科目（32単位）、専門教育科目（64単位）、自由選択科目（28単位）の科目の中から履修していく。専門教育科目は講義、演習、実習などの様々な形態の授業がある。講義、演習では舞踊・スポーツなどの身体表現行動について、芸術学、民俗学、教育学、身体運動科学などの分野を幅広く学ぶことができる。ダンスの実技授業は、モダンダンスのテクニクを中心に、バレエ、日本舞踊、民族舞踊のジャンルも学ぶことができる。加えて、作品創作を学びながら最終的に全国大会へ出場する授業（舞踊上演法実習）、定期公演に向けて作品創作、上演を行う授業（舞踊創作法実習）など実際の舞台で作品を発表できる場が設けられている。舞踊教育法実習や保健体育科教育法、球技や陸上競技などの体育競技の授業を通して指導者として必要な知識・資質を実践的に身につけ、保健体育の教員免許取得を目指すこともできる。豊富な理論と実技双方から学ぶことのできるカリキュラムとなっている。

お茶の水女子大学はもともと女子養成機関であった東京女子師範学校が前身であり、今も多くの女性教員、指導者を全国へ送り出している。芸術・表現行動学科は、「総合的な教養をもち、音楽や舞踊に代表される芸術および表現行動について、幅広い基礎知識と深い専門的・応用的知識と実技力を体系的に習得したうえで、それにもとづく実践力やリーダーシップを身につけた人材を育成する（学士課程ディプロマ・ポリシー抜粋）」ことを教育目標に掲げ、社会の中でリーダーとなる女性の育成を発足当時より現在も目指している。

〈舞踊教育学コースカリキュラム〉 ※履修ガイド (平成31年度2019年4月3日更新) 参照

<p>コア科目 (文理融合リベラルアーツ・基礎講義・情報18単位、外国語12単位、スポーツ健康2単位)</p>
<p>〈文理融合リベラルアーツ〉リベラルアーツ演習Ⅰ・Ⅱ、生命と環境1～9 (講義)、生命と環境21～26 (演習・実習)、色・音・香1～10 (講義)、色・音・香22 (演習・実習)、生活世界の安全保障1～10 (講義)、生活世界の安全保障23、25、26 (演習・実習)、ことばと世界1～12 (講義)、ことばと世界27 (演習・実技)、ジェンダー1～10 (講義)</p>
<p>〈基礎講義〉哲学、法学Ⅰ・Ⅱ、政治学入門、ミクロ経済学入門、マクロ経済学入門、基礎微分積分学、基礎線形代数学、統計学、総合コース、お茶の水女子大学論、防災・危機管理、自然災害に対する防災・減災、学修ポートフォリオ入門、自然科学課題研究支援プログラム</p>
<p>〈情報〉必修科目：情報処理演習(1)・(2)、選択科目：メディアリテラシ(1)・(2)、文理融合データサイエンスⅠ・Ⅱ、情報科学(1)・(2)、情報処理学(1)・(2)、プログラミング演習1・2、コンピュータ演習1・2、情報学演習1・2</p>
<p>〈外国語〉基礎英語Ⅰ(1)・(2)、基礎英語Ⅱ(1)・(2)、中級英語Ⅰ(1)・(2)、中級英語Ⅱ(1)・(2)、英語コミュニケーションⅢ(1)・(2)、英語コミュニケーションⅣ(1)・(2)、英語コミュニケーションⅤ(1)・(2)、英語コミュニケーションⅥ(1)・(2)、英語プレゼンテーションⅠ(1)・(2)、英語プレゼンテーションⅡ(1)・(2)、グローバル・イングリッシュⅠ(1)・(2)、グローバル・イングリッシュⅡ(1)・(2)、Advanced Communication TrainingⅠ(1)・(2)、Advanced Communication TrainingⅡ(1)・(2)、Advanced Communication TrainingⅢ(1)・(2)、Advanced Communication TrainingⅣ(1)・(2)、Advanced Communication TrainingⅤ(1)・(2)、Advanced Communication TrainingⅥ(1)・(2)、英語コミュニケーションⅠ(1)・(2)、英語コミュニケーションⅡ(1)・(2)、上級英語Ⅰ(1)・(2)、上級英語Ⅱ(1)・(2)、上級英語Ⅲ(1)・(2)、上級英語Ⅳ(1)・(2)、ビジネス英語Ⅰ(1)・(2)、ビジネス英語Ⅱ(1)・(2)、時事英語Ⅰ(1)・(2)、時事英語Ⅱ(1)・(2)、基礎ドイツ語Ⅰ～Ⅳ、基礎ドイツ語(応用)Ⅰ(1)・(2)、基礎ドイツ語(応用)Ⅱ(1)・(2)、発展ドイツ語Ⅰ(1)・(2)、発展ドイツ語Ⅱ(1)・(2)、発展ドイツ語Ⅲ(1)・(2)、発展ドイツ語Ⅳ(1)・(2)、基礎ドイツ語会話Ⅰ(1)・(2)、基礎ドイツ語会話Ⅱ(1)・(2)、ドイツ語初歩Ⅰ(1)・(2)、ドイツ語初歩Ⅱ(1)・(2)、基礎フランス語Ⅰ～Ⅳ、基礎フランス語(応用)Ⅰ(1)・(2)、基礎フランス語(応用)Ⅱ(1)・(2)、発展フランス語Ⅰ(1)・(2)、発展フランス語Ⅱ(1)・(2)、発展フランス語Ⅲ(1)・(2)、発展フランス語Ⅳ(1)・(2)、基礎フランス語会話Ⅰ(1)・(2)、基礎フランス語会話Ⅱ(1)・(2)、フランス語初歩Ⅰ(1)・(2)、フランス語初歩Ⅱ(1)・(2)、基礎中国語Ⅰ～Ⅳ、基礎中国語(応用)Ⅰ(1)・(2)、基礎中国語Ⅱ(1)・(2)、発展中国語Ⅰ(1)・(2)、発展中国語Ⅱ(1)・(2)、発展中国語Ⅲ(1)・(2)、発展中国語Ⅳ(1)・(2)、基礎中国語会話Ⅰ(1)・(2)、基礎中国語会話Ⅱ(1)・(2)、中国語初歩Ⅰ(1)・(2)、中国語初歩Ⅱ(1)・(2)、中国語プレゼンテーションⅠ・Ⅱ、ロシア語初歩Ⅰ(1)・(2)、ロシア語初歩Ⅱ(1)・(2)、ロシア語会話Ⅰ(1)・(2)、ロシア語会話Ⅱ(1)・(2)、朝鮮語初歩Ⅰ(1)・(2)、朝鮮語初歩Ⅱ(1)・(2)、朝鮮語会話Ⅰ(1)・(2)、朝鮮語会話Ⅱ(1)・(2)、現代スペイン語Ⅰ・Ⅱ、スペイン語会話Ⅰ(1)・(2)、スペイン語会話Ⅱ(1)・(2)、現代イタリア語Ⅰ・Ⅱ、現代アジア諸語Ⅰ～Ⅳ</p>
<p>〈スポーツ健康〉必修科目：スポーツ健康実習、選択科目：スポーツ科学概論、健康科学概論、生涯スポーツ</p>

<b>専門教育科目 (必修科目 27 単位、必修プログラム (選択) : 37 単位)</b>
必修科目：舞踊芸術学、民族舞踊学 (1)・(2)、臨床舞踊論、体育原理、動作学 (1)・(2)、モダンダンス・テクニク (初級)、舞踊創作法実習 (舞踊構成法)、舞踊創作法実習 (即興創作)、民族舞踊実習 (基礎)、舞踊教育法実習 (中等教育)、舞踊・運動科学研究法入門、舞踊・運動科学研究法演習、卒業論文
選択科目：スポーツ人間学 (1)・(2)、舞踊学概論、表現行動論Ⅰ・Ⅱ、モダンダンス・テクニク (中級)Ⅰ・Ⅱ、モダンダンス・テクニク (上級)、舞踊創作法実習 (舞踊上演・制作)、舞踊教育法実習 (初等教育)、民族舞踊実習 (発展)、舞踊上演法実習 (初級) (中級) (上級)、舞踊表現技法実習、舞踊芸術学実験演習 (1)・(2)、民族舞踊学実験演習 (1)・(2)、臨床舞踊論実験演習 (1)・(2)、動作学実験演習 (1)・(2)、スポーツ文化論演習 (1)・(2)、陸上競技、器械体操、球技、体づくり運動・武道、水泳実習、日本舞踊実習、バレエ実習、舞踊音楽構成法、運動学 (運動方法学を含む)、解剖学、生理学 (運動生理学を含む)、体育心理学、衛生学及び公衆衛生学、学校保健、病理学、学校安全と救急看護、舞踊学特殊講義、運動科学特殊講義、表現療法講義演習
選択科目：教育方法学概論 (1)・(2)、教育社会学概論 (1)・(2)、文化人類学概論 (1)・(2)、生涯学習概論
自由選択科目 (コア科目、専門教育科目、学部共通科目、他学部の科目、全学共通科目、教職共通科目、教職に関する科目、必修以外の選択プログラムの中から 28 単位)
学部共通科目：ギリシャ語、ラテン語
全学共通科目：NPO 入門、未来起点ゼミⅠ・Ⅱ、パーソナル・ブランディング、女性のキャリアと経済、ファシリテーション、平和と共生演習、国際共生社会論実習、キャリアプラン、ICT とコミュニケーションスキル (基礎) (応用)、アントレプレナーへの道 (入門編) (ビジネスプラン編)、女性のキャリアと法制度、ダイバーシティ論、キャリアプランと進路選択、インターンシップⅠ・Ⅱ、Ocha-Solution Program (基礎)、博物館概論、博物館資料論、博物館経営論、博物館資料保存論、博物館展示論、博物館教育論、博物館実習、博物館情報・メディア論、初等解析学Ⅰ、初等解析学Ⅱ (1)・(2)、初等線形代数学、初等代数学、物理学概論 A・B、基礎化学 A、基礎化学 B (1)・(2)、基礎生物学 A・B、大気・海洋科学概論、物理学基礎実験、化学基礎実験、数理基礎論、確率序論、コンピュータシステム序論、生命情報学概論 (1)・(2)、計算生物学 (1)・(2)、海外交換留学等認定科目、科学英語Ⅰ・Ⅱ、イングリッシュ・キャンプ、Academic Writing、Academic Presentation、Pre Summer Program in English、Summer Program in EnglishⅠ～Ⅵ、国際交流実習Ⅰ・Ⅱ、Interdisciplinary Lectures in EnglishⅠ～Ⅵ、舞台芸術実践概論Ⅰ・Ⅱ、文化芸術制作演習Ⅰ・Ⅱ、物理学サプリメント、生物学サプリメント、英語基礎強化ゼミ、TOEFL 対策ゼミ R/L・S/W、IELTS 対策ゼミ R/L・S/W、企画・運営力養成講座、中国語力強化ゼミⅠ・Ⅱ、ライフステージと心身の健康

※教職に関する科目、他学部の科目は省略

### 1-2. 日本女子体育大学 体育学部 運動科学科 舞踊学専攻<sup>3</sup>

日本女子体育大学は、お茶の水女子大学の前身である女子高等師範学校文科を卒業した二階堂トクヨが1922 (大正11) 年、二階堂体操塾として開塾したのが始まりである。全寮制であった塾は、女子の専門教育、職業進出への要求が社会の中に高まってきている時

代であったこともあり、多くの志願者であった。

1926(大正15)年、財団法人日本女子体育専門学校を設立し、二階堂体操塾は日本初の体育専門学校となり、女子体操教師を養成、教育界に送り出した。1950(昭和25)年、学校法人二階堂学園が設立され、同年体育科と保育科を持つ日本女子体育短期大学が誕生し、1965(昭和40)年には、日本女子体育大学体育学部が誕生した。

1967(昭和42)年に短大体育科に体育専攻と舞踊専攻を設置し、1989(昭和64、平成元)年には、体育学部体育学科に運動学・体育学・健康体力学の3コースを設置。翌年には芸術スポーツコースも増設された。1999(平成11)年、体育学部体育学科を改組し、今の運動科学科、スポーツ健康学科が増設された。運動科学科に舞踊学専攻は含まれる。

舞踊学専攻は、芸術であり表現運動でもある舞踊を、理論と実技の両面から体得することを目的として、「創る・踊る・観る」の3つを柱として掲げている。踊り手としての能力向上、指導力の育成、舞台制作を学べる3要素のカリキュラムが充実している。

教養科目(必修18、選択16以上)、専門基礎教育科目(必修22、選択24以上)、専門教育科目(必修18、選択26以上)の3つの科目から授業を履修するようになっている。専門基礎教育科目では、舞踊だけでなくスポーツ・体育全般の基礎知識を学び、専門教育科目では舞踊の専門性の高い授業を幅広く学んでいき、舞踊と体育を主軸として専門性を高めていく。ダンスの実技は、モダンダンス、コンテンポラリーダンス、バレエ、ジャズダンスの実技の専任教員がおり、この4種類のジャンルのダンスは必修となっている。その他にも選択科目には創作、振付に必要なコンタクト・ワークやインプロヴィゼーションなどの授業、第一線で活躍するプロのダンサーから学べる授業(テクニク&レパトリー)など数多くのダンス実技の授業が履修できるようになっている。また踊ることだけでなく、舞台制作についても学ぶことができる。さらに4年間の授業で身につけた創作、振付、演出、制作などの成果発表として実際の舞台上で上演する舞台上演法や卒業研究の授業もある。さらに教職に必要な授業を履修し保健体育の教員免許を取得することもできる。他には各種目の部活動も盛んに行われ、ダンス関連ではモダンダンス部、舞踊部、競技ダンス部、ダンス・プロデュース研究部、ストリートダンス同好会などがあり、それぞれコンクールなどで優秀な成績を取め、自主公演も行っている。

2020年度4月からは、既設の「運動科学科」と「スポーツ健康学科」を廃止し、4専攻をもとに4学科(スポーツ科学科・ダンス学科・健康スポーツ学科・子ども運動学科)を新設する予定となっている。このダンス学科は、国内初の「ダンス学」という学位が授与されることになっている。舞踊家として、また舞踊指導者として能力を高めたいと考えている女性の育成を目指し、ダンスの実技はもちろんダンスのより専門的な幅広い知識を習得できるカリキュラムに変化していこう。

〈舞踊学専攻カリキュラム〉※2019年度学生便覧 (p.16、17) 参照

専門基礎教育科目 (必修22単位、選択24単位以上)
必修：スポーツ運動学、スポーツ生理学、スポーツ原論、スポーツ心理学、機能解剖学、モダンダンスⅠ・Ⅱ、クラシックバレエⅠ・Ⅱ、ジャズダンスⅠ・Ⅱ、コンテンポラリーダンスⅠ・Ⅱ、スポーツ栄養学、女性のライフステージと運動
選択：健康科学論、発育発達論、表現運動学演習 (エアロビックダンス)、舞踊分析法 (舞踊技術論を含む)、生涯ダンス論、衛生学・公衆衛生学、スポーツマネージメント、救急処置法、体操、器械運動、陸上競技、水泳、バスケットボール、バレーボール、比較舞踊論、スポーツ社会学、舞踊美学、舞踊創作原論、ミュージカル論、学校保健、精神保健、保健科教育法Ⅰ・Ⅱ、体育科教育法Ⅰ・Ⅱ、舞踊音楽演習 (パーカッション)、表現運動学演習 (演技)、舞踊音楽演習 (ヴォイス・トレーニング)、新体操、フォークダンス、ソフトボール、柔道
教養科目 (必修18単位、選択16単位以上)
必修：日本国憲法、女性と仕事、教養演習、情報処理Ⅰ・Ⅱ、国語表現Ⅰ・Ⅱ、英語Ⅰ (基礎) (初級) (中級)、英語Ⅱ (基礎) (初級) (中級)
選択：栄養学入門、生理・生化学入門、近現代史入門、人間心理の理解、ボランティア活動論、日常生活の社会学、数と論理、現代の倫理、日常生活の法律、教養としての経済学、英語EAPⅠ・Ⅱ、英語EGCⅠ・Ⅱ、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、社会のしくみとキャリア形成、データ分析と統計学、知の哲学、教養としての日本文学、音楽の世界、ジェンダー論、コンピュータ実践演習、人間生活と地球環境、ヨーロッパの文学と文化、レクリエーションミュージック・合奏
専門教育科目 (必修18単位、選択22単位以上)
必修：表現運動学、舞踊学原論、シアターダンステクニック、舞踊創作・振付法、舞踊方法学、舞台芸術論、舞踊音楽論、制作Ⅰ、野外上演法
選択：タップダンス、コンタクト・ワーク、ボディ・コンディショニング、舞踊分析法演習、舞踊音楽制作、ダンスカレント、モダンダンスⅢ・Ⅳ、クラシックバレエⅢ・Ⅳ、制作Ⅱ、テクニック&レパートリー、スペイン舞踊、日本舞踊、学校教育ダンス、ジャズダンスⅢ、シアタージャズダンス、コンテンポラリーダンスⅢ、インプロヴィゼーション、舞台演出論、現代の舞踊論、ダンスセラピー論、マルチメディア・パフォーマンス、レパートリー研究、舞踊指導演習 (高齢者・障害者指導法)、舞踊史学、ダンス制作論、舞台上演法、舞踊指導演習 (舞踊家・一般成人指導法)、スポーツ・舞踊活動特別実習、卒業研究

※教職に関する科目は省略

### 1-3. 桜美林大学 芸術文化学群 演劇・ダンス専修<sup>4</sup>

桜美林学園は、中国北京市朝陽門外に清水安三によって崇貞学園を創立したことから始まった。敗戦の影響で日本へ戻った清水安三は桜美林学園を創設し、小、中、高と設置していき、1966 (昭和41) 年に桜美林大学が開学した。今の芸術文化学群になるまでの歩みは、2000 (平成12) 年に総合文化学科から始まり、2005 (平成17) 年により専門性を高めた芸術教育をおこなうため、文学部総合文化学科を分離独立させ、総合文化学群が開

設された。その総合文化学群に演劇専攻、音楽専攻、造形専攻を設置し、2013（平成25）年に総合文化学群は芸術文化学群と名称変更し、演劇専修、音楽専修、造形デザイン専修、映画専修の4専修となり、2018（平成30）年には演劇専修から演劇・ダンス専修と名称変更し、音楽専修、ヴィジュアル・アーツ専修を加えた3専修となっている。

演劇・ダンス専修は演劇とダンスにコース分けはせず、1年次は専修のすべての学生が演劇、ダンス、スタッフ（照明や舞台美術、制作など）の授業を実技、講義ともに全員が一通り受講する。2年次より徐々に専門を絞り、ダンスを専攻する学生は、ダンスの授業を積み上げ式で履修していくが、専門を絞ったとしても演劇やスタッフワークの授業は受講できるようになっている。俳優、ダンサー、テクニカルスタッフ、演出家、劇作家、プロデューサーなど多様な分野の第一線で活躍する教員による指導のもと、自らの適性と目標を発見することができるようにコース分けは行っていないのが特徴である。

もともと演劇を専攻する学生におけるカリキュラムであったため、ダンスの授業は演劇に比べ少ないが、その中でダンスの実技は、コンテンポラリーダンスを中心にバレエ、日本舞踊がある。また舞台芸術研究（OPAL）という授業では、プロの演出家や振付家が指導にあたり、出演者（オーディション選出）とスタッフの学生が一丸となって創作活動を体験し、本格的な劇場で公演する授業もある。さらに学生が自主的に公演を行う、学生劇団の活動が盛んであり、運営や安全管理を実践的に学んでいくことができる。また老人ホームや福祉施設で上演するアウトリーチなど、芸術と社会を結ぶ活動も盛んに行っている。

2020（令和2）年には、芸術文化学群は東京ひなたやまキャンパスへ移転することが決まっており、学生数の増加とカリキュラムや施設の充実を目指している。

〈カリキュラム〉※2019年度入学生用履修ガイド（2019/08/29更新）参照

<b>基礎教育科目最低必要単位 18 単位（コア科目 16 単位必修、ガイダンス科目 2 単位必修）</b>
コア科目必修：キリスト教入門、口語表現Ⅰ、文章表現Ⅰ、英語コアⅠA、英語コアⅠB、英語コアⅡA、英語コアⅡB、コンピュータリテラシーⅠ
ガイダンス科目必修：上演芸術入門
<b>専攻科目最低必要単位 56 単位（学群共通科目 16 単位必修、専修科目 40 単位必修）</b>
学群共通科目：美学A・B、演劇の世界、ダンスの世界、芸術概論A・B、芸術と人間A・B、日本文化論A・B、西洋文化論A・B、アジア文化論A・B、社会文化・メセナ論、知的財産権通論、シアターマネジメント論、音楽マネジメント論、アートマネジメント論、メディア論A・B、映像ビジネス論A・B、芸術文化研修、芸術文化特講、芸術文化基礎、インターンシップ、専攻演習Ⅰ・Ⅱ、卒業研究Ⅰ・Ⅱ



<p>専修科目：(必修) 舞台芸術基礎 A・B</p> <p>(選択) 劇場文化史 A・B、海外演劇特殊研究 A・B、日本演劇史、古典演劇作品研究 A・B、日本の文字文化、日本古典劇演習(狂言)、日本古典劇研究、日本近代劇研究、日本現代劇研究、宗教劇研究、演劇論、戯曲基礎、戯曲演習、演出論、演出研究、舞踊論 A・B、舞踊文化比較論、身体原理入門、舞台芸術研究、分析批評入門、上演実技 I～IV、身体訓練基礎、身体訓練演習、制作基礎 I・II、制作実地演習、技術スタッフ基礎、前衛の世界、技術スタッフ入門、照明・音響演習、舞台美術と舞台運営、技術スタッフ応用 I・II、オーディオ・ドラマ、映像身体表現演習、ダンス基礎 I・II、ダンスクラシック I～III (初心者)・(経験者)、ダンスコンテンポラリー I～III、日本舞踊 I～III、コミュニティダンス論、コミュニティダンス演習 I・II、セルフプロデュース演習、東洋演劇演習 A・B、発声朗読法 I・II、上演美術研究、舞台監督の仕事 I・II、詩と朗読、詩と創作、演劇芸術応用論 I・II、演劇芸術応用演習 I・II</p>
<p><b>自由選択科目</b></p>
<p>〈・基礎教育科目、専攻科目で、最低必要単位を超えて履修した単位・自学群他専修科目・他学群専攻科目・基盤教育の科目(外国語科目を含む)・他大学等(短期大学・海外留学の科目を含む)認定単位・各種技能審査による認定単位)</p> <p>基礎教育科目：聖書、キリスト教と他宗教、キリスト教と社会、キリスト教と芸術、コンピュータリテラシーⅡ、口語表現Ⅱ、文章表現Ⅱ、文章構成法、人間理解、社会理解、自然理解、プロジェクト、国際理解教育、地域社会参加、大学での学びと経験、数の基礎理解、キャリアデザイン A～D、語学研修</p> <p>外国語科目：アラビア語 I～IV、イタリア語 I～VI、インドネシア語 I～IV、カンボジア語 I～IV、ロシア語 I～VI、スペイン語 I～VI、タイ語 I～IV、ドイツ語 I～VI、ビルマ語 I～IV、フランス語 I～VI、ベトナム語 I～IV、ポルトガル語 I～IV、モンゴル語 I～IV、ラテン語 I～IV、ロシア語 I～IV、中国語 I～VI</p>

#### 1-4. 尚美学園大学 学芸術情報学部 舞台表現学科 ダンスコース<sup>5</sup>

尚美学園大学は、1926(大正15)年に音楽家赤松直が「尚美音楽院」を開設したのが始まりである。1981(昭和56)年に尚美音楽短期大学が開学し、短大から2学部3学科からなる4年制大学へと改組転換したのは2000(平成12)年のことである。そして2020(令和2)年には、スポーツマネジメント学部の開設を予定している。

現在は、芸術情報学部、総合政策学部の二つの学部からなり、総合政策学部は総合政策学科の1学科、芸術情報学部は情報表現学科、音楽表現学科、音楽応用学科、舞台表現学科の4学科で構成されている。さらに学科ごとに細かくコース分けがあり、ダンスコースは、舞台表現学科の中にミュージカルコース、演劇コースとともに設置されている。入学時にミュージカル・演劇・ダンスの3つのコースの中から自身が学びたいコースを選び、1年次に、教養科目の単位を取得しながら、各コース共通の表現基礎科目を学び、2年次からは、最終的なコースを決定し、専門性を深めて履修していく流れとなっている。

ダンスコースは、ダンサー、振付家、企画制作者を目指せる授業が用意されている。ダンスの実技授業は、バレエ、タップダンス、ジャズダンス、コンテンポラリーダンス、日

本舞踊、狂言などの身体表現の基礎を身につけることができる。さらに1、2年次は振付講師の指導の下、出演者として作品を発表し、3年次は、作品創作のみでなく公演全体の指揮と運営を担い発表する場が設けられている。最終年度の4年次では卒業研究において企画運営、広報、演出、振付、出演の全てを担い公演を作り上げていく。またダンスコースのある学科には、演劇、ミュージカルのコースもあるためそれぞれの専門の授業を自由に履修できる。学部全体には音楽、映像関連のコースなどもあるため舞台芸術に関わる科目を多様に学べるようになっている。

〈カリキュラム〉※2019年度シラバス検索調べ。

教養科目
必修：情報リテラシーⅠ・Ⅱ
選択：自己表現とコミュニケーション、キャリアと自己形成、知の冒険、基礎就業力養成ゼミナールA～C、コーラスA・B、生涯スポーツ論、スポーツ表現A（バスケットボール）、スポーツ表現B（バドミントン）、スポーツ表現C（サッカー）、スポーツ表現D（テニス）、スポーツ表現E（卓球）、スポーツ表現F（ソフトボール）、Webデザイン基礎A・B、データ分析法Ⅰ・Ⅱ、ビジネスプログラミングⅠ・Ⅱ、情報システム概論、確率と統計基礎、情報学概論、英語Ⅰ～Ⅳ、選択英語Ⅰ～Ⅳ、ドイツ語Ⅰ～Ⅳ、フランス語Ⅰ～Ⅳ、イタリア語Ⅰ～Ⅳ、スペイン語Ⅰ～Ⅳ、中国語Ⅰ～Ⅳ、韓国語Ⅰ～Ⅳ、英語圏文化論、ドイツ語圏文化論、フランス語圏文化論、スペイン語圏文化論、中国語圏文化論、韓国語圏文化論、日本語能力試験対策講座、哲学、法と社会、社会と人間、人間の心理、文化人類学、暮らしと文化、音楽と社会、スポーツと社会、クラシック音楽、文学、文学（日本文学）、美術、演劇と舞台芸術、歴史、人間と文化特演（日本文学）、人間と文化特演（クラシック音楽）、情報化と社会、ジャーナリズム、著作権、コミュニケーションの心理、エンタテインメント企画制作、ポピュラー音楽、日本国憲法、アート・マネジメント、異文化コミュニケーション、現代社会と経済、現代社会と政治、地球と環境、現代の企業経営、都市と建築、スポーツ国際支援、現代の諸相特演（エンタテインメント企画制作）、現代の諸相特演（都市と建築）、現代の諸相特演（著作権）、現代の諸相特演（地球と環境）、現代の諸相特演（現代社会と政治）、西洋文化と諸芸術、都市と芸術、都市と芸術特演、ワークショップ（ガムラン合奏）、ワークショップ（ミュージック・パフォ）、放送文化史
芸術情報学部専門科目
学部共通科目
必修：デザイン基礎、人間と色彩、ヴィジュアル表現基礎Ⅰ
選択：音楽基礎論、映像基礎論、MIDI演習、西洋音楽史Ⅰ・Ⅱ、ポピュラー音楽史、日本芸能史、諸民族の音楽、音楽美学、空間芸術論、美学、映画論、録音表現概論、著作権法、情報法制、音楽企画概論、音楽療法概論、音楽療法演習、デジタル印刷表現、簿記論、マーケティングリサーチ、マルチメディア制作、ヴィジュアル表現基礎Ⅱ、認知心理学A・B、感性音響学、音楽の基礎ゼミ、画像と映像の基礎

舞台表現学科専門科目
必修：芸術概論、日本美術史、西洋美術史、身体表現概論、人間科学論、演劇表現基礎演習Ⅰ・Ⅱ、舞踊表現基礎演習Ⅰ・Ⅱ、卒業研究
選択：美術論、デッサン基礎実習、立体造形基礎、身体表現論A～C、劇場文化論、演劇史Ⅰ・Ⅱ、演技論Ⅰ・Ⅱ、演劇表現基礎演習Ⅲ・Ⅳ、演劇表現演習Ⅰ・Ⅱ、演劇特殊研究A・B、舞踊史Ⅰ・Ⅱ、舞踊論Ⅰ・Ⅱ、舞踊表現基礎演習Ⅲ・Ⅳ、舞踊表現演習Ⅰ・Ⅱ、ミュージカル史Ⅰ・Ⅱ、ミュージカル表現基礎演習Ⅰ～Ⅳ、ミュージカル表現演習Ⅰ・Ⅱ、図面制作実習、舞台装置研究、舞台装置演習、舞台技術研究、舞台技術演習、舞台照明研究、舞台照明演習、舞台音響・音響効果研究、舞台音響・音響効果演習、舞台表現演習ⅠA～ⅠC、舞台表現演習ⅡA～ⅡC、舞台応用芸術論、舞台芸術批評論、演出論Ⅰ・Ⅱ、戯曲論、劇作論、劇作演習、プロデュース研究、プロデュース演習、古典芸能基礎演習Ⅰ・Ⅱ、古典芸能研究Ⅰ・Ⅱ、日本美術史概論、総合演習Ⅰ・Ⅱ

### 1-5. 洗足学園音楽大学 音楽学部 音楽学科 バレエコース/ダンスコース<sup>6</sup>

洗足学園音楽大学は、1924（大正13）年に洗足学園の創設者前田若尾が、東京都品川区の自宅に私塾を創設したことから始まった。2年後の1926（大正15）年に現在の東京都目黒区洗足に移り、洗足高等女学校を設立した。その後中学校、幼稚園、小学校と開講し、1962（昭和37）年に洗足学園短期大学音楽科が設置された。短期大学が設置されて5年後の1967（昭和42）年に洗足学園大学音楽学部音楽学科が開校した。2003（平成15）年に洗足学園音楽大学に名称変更した。

洗足学園音楽大学音楽学部は18のコースに分かれている。その中にバレエコース、ダンスコースが含まれている。バレエコースは2015（平成27）年度に、ダンスコースは2018（平成30）年度に設置されたここ最近できたコースである。公演スペースが8か所もあり、大学全体で年間200回を超える公演が行われている。舞台での数多くの体験を重視し、各コースでの公演はもちろん他コースとのコラボレーションも積極的に取り組んでいる。ダンスコースは、昨年設置されたばかりのコースのため、今回はバレエコースのみを取り上げる。

バレエコースは、グローバルクラス、谷桃子バレエ団クラス、牧阿佐美バレエ団クラスの3つの中から入学時に自分に合ったクラスを選択し、バレエ研究、バレエ実習という授業でそれぞれのクラスに分かれレッスンや振付を行う。47名のバレエの指導陣のもとバレエを学ぶ充実した環境が整えられている。また週3回ある合同クラスの授業では、3つのクラスが合同でレッスンをし、所属するクラス以外の教員のレッスンを受けることもできる。必修科目はバレエ研究のみで、その他は音楽理論の基礎を学ぶ講義科目（専門選択科目）、ダンスに関する講義科目（一般総合科目）、様々なジャンルのダンス実技科目（専門選択科目）の中から授業を選択し履修していく。特に音楽の授業は下記の表の通り数多くの授業が展開されているので中学、高校の音楽の教員免許を取得することも可能である。さらにバレエ指導者の育成として付属幼稚園の児童を対象としたバレエ教室のアシスタントを経験できる授業があり、指導者として実践的な知識を身につける。また年に二回

授業成果を披露する場を設け、毎年2万人を超える観客を動員して発表している。その他にも他コースである吹奏楽とのコラボレーションや声優アニメーションコースとのナレーション付バレエというコラボレーション企画など多数のコラボレーション公演を実施し、学生は積極的に外部の公演にも出演している。「将来幅広く世界で通用するプロフェッショナルなダンサーを目指す人材（バレエコースアドミッション・ポリシー、一部抜粋）」を求めていることから、バレエを専門とする多くのプロフェッショナルな指導陣のもとと実技・演習を中核とした授業を展開し、多くの実践的な場を提供している。また音楽大学ならではのジャンルを超えたコラボレーションも魅力のひとつだろう。

〈バレエコースカリキュラム〉2019年度カリキュラムマップ（2019-06-20版）参照

<b>専門必修科目（24単位）</b>
バレエ研究Ⅰ～Ⅳ
<b>専門選択科目〈全コース共通〉（音楽理論を学ぶ講義科目）（12単位）</b>
邦楽ワークショップ2～4、日本伝統芸能研究1～4、古典邦楽作品研究1・2、現代邦楽作品研究1・2、邦楽サウンド論1・2、邦楽実習（謡曲）1～4、邦楽実習（民謡）1～4、邦楽実習（笛）1～4、吹奏楽演奏理論1～4、音楽史、声楽（教職）、学内リサイタル講座、即興演奏講座（初級）、（中級）、音楽と宗教、楽器学、ジャズの歴史1・2、ピアノ演奏史、管弦楽史、オペラ史、楽式論Ⅰ・Ⅱ、音楽美学、現代音楽、幼児音楽指導法（含リトミック）、日本の伝統芸能と音楽、諸民族の音楽、和声学研究、管弦楽概論、楽器と演奏論、音楽分析総合講座、日本音楽史、音楽学特殊講義1・2、東洋音楽史、音楽鑑賞論、ギター奏法演習、和楽器演習（箏）、和楽器演習（三味線）、尺八奏法、篠笛奏法、箏奏法、三味線奏法、DTM基礎演習、DTMプログラミング演習、ジャズ実習、教職ピアノ実習Ⅰ-Ⅰ、Ⅰ-Ⅱ、教職ピアノ実習2～6、教職合奏指導法、指揮法Ⅰ・Ⅱ、ソルフェージュⅠ～Ⅳ、ソルフェージュ研究Ⅰ・Ⅱ、音楽理論入門、音楽分析基礎講座、和声学Ⅰ～Ⅴ、作曲法・編曲法Ⅰ・Ⅱ、対位法、対位法研究、古代、中世、ルネッサンスの音楽史、バロックの音楽史、古典派の音楽史、ロマン派、近・現代の音楽史、ミュージカルⅠ-1、Ⅰ-2、記譜法基礎、記譜法概論、シンガーソングライター講座1～4、日本の伝統的歌唱（民謡）、日本の伝統的歌唱（謡曲）、日本の伝統的歌唱（長唄）
<b>一般総合科目（ダンスに関する講義科目）（12単位）</b>
芸術史Ⅰ・Ⅱ、外国文学、法学（日本国憲法）、経済学Ⅰ・Ⅱ、著作権法、西洋文化史キャリアデザイン講座1・2、社会福祉論、ビジネス講座（秘書検定対策）、音響学Ⅰ・Ⅱ、情報機器の操作、英語Ⅰ-Ⅰ～2-Ⅱ、独語Ⅰ-Ⅰ～2-Ⅱ、仏語Ⅰ-Ⅰ～2-Ⅱ、伊語Ⅰ-Ⅰ～2-Ⅱ、保健体育、体育実技（集中）（タップダンス、ミュージカルダンス、ジャズダンス、ストリートダンス）、ジェンダーⅠ・Ⅱ、心理学Ⅰ・Ⅱ、読解力養成講座1・2、文章力養成講座1・2、分析力養成講座1・2、ポピュラー芸術論、テクノロジーと芸術、芸術と社会、音響工学芸術論、プロデュース学、アートマネジメント入門、舞踊史1～4、運動生理学、栄養学、解剖学、動作学、映像学1・2、DTV演習、DTP演習、建築と芸術Ⅰ・Ⅱ、AIと芸術Ⅰ・Ⅱ、作詩基礎研究1・2、応用演奏会実習1-1～1-4、応用演奏会実習2-1～2-4、応用演奏会実習3-1～3-4、応用演奏会実習4-1～4-4、インターンシップ1・2

専門選択科目〈各コース〉(様々なジャンルのダンス実技)
バレエ実習 1-1～4-1 (グローバルクラス、牧クラス、谷クラス) バレエ実習 1-2～4-2 (グローバルクラス、牧クラス、谷クラス) 身体表現実習 1-1～4-1 (バレエ)、身体表現実習 1-2～4-2 (バレエ) 身体表現実習 1-3～4-3 (バレエ)、身体表現実習 1-4～4-4 (コンテンポラリーダンス)、身体表現実習 1-5～4-5 (キャラクターダンス、ジャイロキネシス)、バレエ指導特別実習 1～4、ダンスパフォーマンス 1-1～4-4 (タップダンス、フラメンコ、ジャズダンス、ストリートダンス、タップダンス) 英会話講座 1・2、シアターダンス 1-2 (日本舞踊)、卒業研究

### 1-6. 昭和音楽大学 音楽学部 音楽芸術運営学科 バレエコース<sup>7</sup>

昭和音楽大学は、1930(昭和5)年に日本のオペラ界の第一線で活躍していた下八川圭祐によって日本の音楽界でいち早く「総合的なオペラ教育」を理念に掲げた声楽研究所を創設したことから始まった。その10年後の1940(昭和15)年に東京声専音楽学校を開設するも戦災により全焼し、再度校舎が完成したのは1952(昭和27)年のことだった。新校舎が創設されてからは文部省から教員養成所の指定を受けたり、学外ホールにて学校オペラの公演を実現させたりとオペラ教育を実現的なものとしていった。1969(昭和44)年に昭和音楽短期大学を開学し、1984(昭和59)年には昭和音楽大学が開学した。

現在、昭和音楽大学の音楽学部は音楽芸術表現学科と音楽芸術運営学科の二つの学科に分かれ、音楽芸術表現学科は14コース、音楽芸術運営学科は6コース設置されている。バレエコースは、音楽芸術運営学科に含まれている。

バレエコースは、「ダンサーや指導者に必要な技術と理論を修得しバレエ界で活躍できる人材を育成」という理念を掲げ、バレエ中心のカリキュラムが組まれている。

カリキュラムは必修科目を4年間で合計76単位を取得することとなっている。必修科目のほとんどがバレエの授業である。それに加え選択必修科目のピアノ、外国語科目、教養科目の中からそれぞれ選択し最低でも18単位取得することが条件である。その他は30単位以上を選択科目から自由に選択するようになっている。バレエの実技は毎日履修できるようになっていて、バレエ演習Ⅰでは日頃の授業の学習成果を発表する場が試演会として設けられている。バレエ演習Ⅱではコンテンポラリーダンス、バレエ演習Ⅲではキャラクターダンスも必修となっている。海外研修という授業では海外でのレッスンを受けることができ、逆に海外から一流の指導者を招聘しレッスンを受けられる授業もある。その他のダンスの実技授業では日本舞踊、狂言、ジャズダンスなどを学ぶことができる。4年次には付属のバレエ教室で指導実習を行い、実践的に指導方法を学んでいく。バレエを中心としたカリキュラムで技術や指導力を磨き、卒業後はバレエ団への所属、バレエ講師、パークダンサーなどの進路へ進む学生が多くなっている。

## 〈バレエコースカリキュラム〉

学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準学生が修得すべき知識及び能力に関する情報（平成31（2019）年度入学）

必修科目（1年次25単位、2年次23単位、3年次16単位、4年次12単位、合計76単位）	
1年	（専門科目）バレエ・クラスⅠ①、バレエ演習Ⅰ～Ⅳ①、舞踊史、解剖学、バレエ指導法演習①、バレエ音楽演習①
	（教養科目）芸術特別研究Ⅰ、基礎ゼミ
2年	（専門科目）バレエ・クラスⅠ②、バレエ演習Ⅰ～Ⅳ②、動作学、舞踊心理学、バレエ指導法演習②、振付創作法①
	（教養科目）芸術特別研究Ⅱ
3年	（専門科目）バレエ・クラスⅠ③、バレエ演習Ⅰ～Ⅳ③、舞踊学基礎演習、バレエ指導法演習③、振付創作法②
4年	（専門科目）バレエ・クラスⅠ④、バレエ演習Ⅰ～Ⅳ④、バレエ卒業研究
選択必修科目（専門科目（ピアノ）：最低2単位、外国語科目：最低8単位、教養科目最低8単位、最低18単位）	
1年	（専門科目）ピアノⅡ①、鍵盤演奏表現Ⅰ （外国語科目）基礎英語Ⅰ・Ⅱ、初級英語Ⅰ～Ⅴ、中級英語Ⅰ～Ⅴ、上級英語Ⅰ～Ⅴ、基礎イタリア語、基礎ドイツ語、基礎フランス語 （教養科目）演奏とからだⅠ・Ⅱ、哲学、文学、西洋文化史Ⅰ・Ⅱ、日本文化史Ⅰ・Ⅱ、美術史Ⅰ・Ⅱ、日本国憲法、生活と経済、経済学、心理学、心の健康、情報機器演習（基礎）、情報機器演習（応用）Ⅰ・Ⅱ、体育理論、体育実技、音響学、ボランティア論、音楽活動研究①、博物館概論、生涯学習概論Ⅰ、図書館概論 ※留学生等の日本語科目は省略
	（外国語科目）初級イタリア語、初級ドイツ語、初級フランス語 （教養科目）キャリアデザイン、音楽活動研究②、教育心理学
3年	（外国語科目）中級イタリア語Ⅰ・Ⅱ、中級ドイツ語Ⅰ・Ⅱ、中級フランス語
	（教養科目）音楽活動研究③
4年	（外国語科目）上級イタリア語、上級ドイツ語、上級フランス語
	（教養科目）音楽活動研究④

選択 (30 単位以上)	
1年	(ソルフェージュ科目) 基本ソルフェージュ①、聴音・視唱ソルフェージュ①、鍵盤ソルフェージュ①、総合ソルフェージュ①
	(その他科目) 声楽Ⅱ①、アートマネジメント概論Ⅰ・Ⅱ、ジャズの歴史と作品、タップダンス①、ハーモニー演習①、パフォーマンス①、バレエ・クラスⅡ～Ⅴ①、バレエ演習Ⅴ①、ボディコンディショニング、ポピュラー音楽概論、ミュージックビジネスと社会、ライブビジネスと社会、栄養学演習、音楽基礎演習、音楽教育メソッド実践Ⅰ、音楽療法概説、合唱①、合奏Ⅳ①、鍵盤音楽の歴史と作品、児童心理、障がい児教育概論、西洋音楽史Ⅰ、日本古典芸能Ⅰ・Ⅱ、発達心理学、舞台スタッフ論①・②、舞台衣裳製作法、舞台芸術概論、舞台制作概論、簿記・会計入門
2年	(ソルフェージュ科目) 基本ソルフェージュ②、聴音・視唱ソルフェージュ②、鍵盤ソルフェージュ②、総合ソルフェージュ②
	(その他科目) ピアノⅡ②、声楽Ⅱ②、オペラの歴史と作品、コンピュータ音楽概論、ジャズダンス、ステージマネージャー演習①、ハーモニー演習②、パフォーマンス②、バレエ・クラスⅡ～Ⅴ②、バレエ演習Ⅴ②、バレエ音楽演習②、バレエ作品研究、ミュージカルの歴史と作品、医学一般、演劇の歴史と作品、音楽教育メソッド実践Ⅱ、音楽心理学、海外研修Ⅱ、海外研修Ⅳ、介護概論、楽式論Ⅰ・Ⅱ、合唱②、合奏Ⅳ②、管弦楽概論、器楽の歴史と作品、経営学Ⅰ、芸術関係法規、芸術文化と社会Ⅱ、芸術文化環境論、鍵盤演奏表現Ⅲ・Ⅳ、社会福祉概論、西洋音楽史Ⅱ、台本・シナリオ演習①、日本音楽概論Ⅰ・Ⅱ、日本古典芸能Ⅲ、舞台衣裳概論、民族音楽概論Ⅰ・Ⅱ
3年	(ソルフェージュ科目) 基本ソルフェージュ③、聴音・視唱ソルフェージュ③、鍵盤ソルフェージュ③、総合ソルフェージュ③
	(その他科目) ピアノⅡ③、声楽Ⅱ③、スコアリーディングⅡ、ステージマネージャー演習②、ハーモニー演習③、パフォーマンス③、バレエ・クラスⅡ～Ⅴ③、バレエ演習Ⅴ③、フィールドインターンシップ①、ポリフォニー演習、運動生理学、演出論、音楽情報論、音楽美学、海外研修Ⅴ、合奏Ⅱ、合奏Ⅳ③、環境音楽論Ⅰ・Ⅱ、看護学演習、経営学Ⅱ、鍵盤演奏表現Ⅱ、作曲・編曲法Ⅰ、指揮法Ⅰ、台本・シナリオ演習②、日本伝統音楽演習(歌唱)、日本伝統音楽演習(和楽器)、伴奏法Ⅱ、舞台機構調整演習、文化政策論Ⅰ・Ⅱ
4年	(その他科目) ピアノⅡ④、声楽Ⅱ④、ステージマネージャー演習③、パフォーマンス④、バレエ・クラスⅡ～Ⅴ④、バレエ演習Ⅴ④、バレエ指導法演習④、フィールドインターンシップ②、合奏Ⅳ④

## 2. 考察・まとめ

6大学のカリキュラムから3つの特色に分類した。

まずお茶の水女子大学と日本女子体育大学は、中・高の保健体育の教職が取得でき、舞踊（ダンス）の専門性を高めるとともに教育者・指導者の育成が中心になっている。様々なダンスに触れ、多様な身体表現を学ぶ実技授業と舞踊学をはじめ教育学、体育学など幅広く理論を学ぶ講義の双方から踊り手として、指導者としての知識、資質を体得していき専門性を高めていくカリキュラムとなっている。長きに渡り体育の中に舞踊は位置付けられ、現在中学校ではダンスが必修となり、メディアではダンス部がレベルの高いダンスを披露する姿が多く取り上げられている中、未だに教育現場ではダンスの指導に困惑している教員が多くいることが現状である。ダンスの指導ができる教員は一層求められ、長年舞踊教育に特化しているお茶の水女子大学と日本女子体育大学は多くの卒業生が教員として活躍している。この2大学は舞踊と体育が中心のカリキュラムとなっているのが特色である。

次に桜美林大学と尚美学園大学は、ダンスだけでなく演劇など他分野の表現も学び、舞台に関わる舞台美術、照明、音響などのスタッフワークの授業も充実している。舞台芸術を総合的に学ぶことのできるカリキュラムで、様々な選択肢から自分に合った分野を見つけ専門性を高めていくことができる。ダンサーや振付家だけでなく、舞台スタッフや企画運営などあらゆる角度から舞台に関われる人材を育成している。また芸術祭や町おこしのアートイベント、学校や施設でのアーティストによるWSなど芸術と社会を結ぶ活動が様々なところで行われているが、この2大学でも地域交流や老人ホーム、福祉施設で上演するアウトリーチなどを積極的に行い、舞台以外にも活動の幅を広げられるような取り組みが行われている。

最後に洗足学園音楽大学と昭和音楽大学は、どちらもプロフェッショナルなダンサーの育成を目指し実技の専門性を重視した教育方針で、4年間を通してバレエ中心のカリキュラムとなっている。第一線で活躍するプロの講師の充実、実技を中心とした授業、舞台発表の充実が特徴である。また付属のバレエ教室で実習を行いバレエの指導を実践的に学ぶこともできる。バレエコースの学生は、バレエ講師やバレエ団に入団、テーマパークダンサーなどバレエを生かした進路に進んでいる。

以上より「教育」に特化したカリキュラム、「芸術」に特化したカリキュラム、そして「専門」性に特化したカリキュラムの3つにカテゴリー分けを行った（表1）。



表1

<p><b>教育</b>：お茶の水女子大学、日本女子体育大学</p> <p>・教育現場での指導者の育成に特化し、舞踊と体育を幅広く学ぶ中で専門性を高めていく。</p>	
<p><b>芸術</b>：桜美林大学、尚美学園大学</p> <p>・舞台芸術を総合的に学ぶ中で自身の専門を見つけ専門性を深めていく。</p>	
<p><b>専門</b>：洗足学園音楽大学、昭和音楽大学</p> <p>・専門性に特化してプロを目指していく。</p>	

「教育」の категорияは、舞踊・体育の専門的知識を学び、舞踊（ダンス）に特化した体育教員の資質が体得できる。様々なダンスの実技授業に加え、教職に関する授業が中心のカリキュラムとなっている。「芸術」の категорияは、舞踊（ダンス）におけるあらゆる身体表現から他分野の表現、さらに舞台に関わるスタッフの技術など舞台芸術を総合的に学べるカリキュラムである。この「教育」「芸術」の2つの categoriaの大学はすでに定着している分野であり、時代に応じて発展し続けている。

2000年代から増加しているのが「専門」の categoriaに含まれるコースである。洗足学園音楽大学と昭和音楽大学のバレエコースと同様に他大学でもテーマパークダンスコースやポピュラーダンスコースなどプロの講師陣の授業を受け、舞台やメディア、テーマパークなどで活躍できるプロフェッショナルなダンサーを育成するコースが増加傾向にある。様々なジャンルの舞踊（ダンス）、教育、舞台など幅広く学ぶことを目的とした従来のカリキュラムから、舞踊（ダンス）の中の1ジャンルを極める実技中心としたカリキュラムを近年多く目にするようになった。専門学校や舞踊団のように毎日レッスン漬けのような時間割が展開されている。これが現代の学生のニーズに適しているのか、今後検討していきたい。

本研究は、6大学のカリキュラム内容をまとめるまでにしか及ばなかった。今回取り上げられなかった大学についても3つの categoriaを軸に考察し、各大学の教育内容を確認し、日本の大学における舞踊（ダンス）を学ぶ場がどのように展開していくのか動向を探っていきたいと考えている。

## 注

1. 他にもダンスの授業を展開している大学は多数あるが、本論では専修、専攻、コースに舞踊（ダンス）あるいはダンスのジャンル（バレエなど）が明記されている大学を抽出した。
2. お茶の水女子大学に関する情報は、『お茶の水女子大学百年史』（「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会,1984）、大学HP『お茶大の歩み』、『履修ガイド（平成31年度2019年4月3日更新）』、『学士過程カリキュラム・ポリシー/ディプロマ・ポリシー』（2019年度4月2日更新）、『2019年度シラバス』参照。
3. 日本女子体育大学に関する情報は、大学HP『沿革大学の歩み』、『学園の歴史』、『舞踊学専攻の目的』、『2019年度学生便覧（p.16、17）』、『2019年度シラバス』参照。
4. 桜美林大学に関する情報は、『清水安三遺稿集 石ころの生涯』（清水畏三編者、1977）、『2019年度入学生用履修ガイド（2019/08/29更新）』、『2019年度シラバス』参照。
5. 尚美学園大学に関する情報は、大学HP『沿革』、『3つのポリシー』、『履行状況報告書』『2019年度シラバス』参照。
6. 洗足学園音楽大学に関する情報は、大学HP『洗足の由来 学園の沿革』、『アドミッション・ポリシー/カリキュラム・ポリシー/ディプロマ・ポリシー（2019年6月20日版）』、『2019年度音楽学部音楽学科音楽専攻科2019年度シラバス（2019年6月20日版）』、『洗足学園音楽大学音楽学部2019年度カリキュラムマップ（2019年6月20日版）』、『2019年度シラバス』参照。
7. 昭和音楽大学の情報は、大学HP『教育方針・ポリシー・学習成果』、『学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準学生が修得すべき知識及び能力に関する情報（平成31（2019）年度入学）』、『2019年度シラバス』参照。